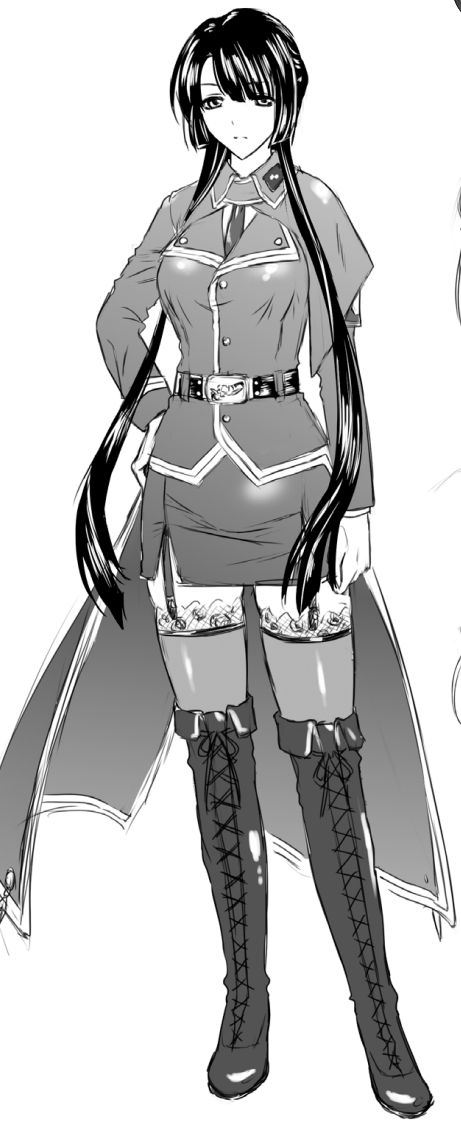
高岡智空
[挿絵]からすま弐式

立ち読み版

登場人物紹介

Characters



ツバキ＝エンデュミア

黒髪の美しい女兵士。冷静沈着な思考と、類い稀なパワーウイングの操作術で、母国フィオーレの危機を数々救ってきた。

サイネリア＝パプリシオン

ツバキと共に戦う軍人。実剣類の武器攻撃が得意。金髪縦ロールのお嬢様で、敵に対しては高慢な態度を取ることも。

リリィ＝セシル

機械工学・薬学に関しては天才と言われた少女。開発機器の成果確認の名目で戦場に出る。子供体型。

トスカータ＝ドリオ

フィオーレと戦う敵国ドリオの王。屈強な態度を見せ付ける。

ラディマス＝ミルーダ

基地の最高司令である大佐。ツバキの叔父でもある。

序　章　戰華の飛翔　007
第一章　才媛の過去　014
第二章　令嬢の痴演　062
第三章　手折れる戰華　116
第四章　淫虐の逃走劇　170
第五章　戰華のブーケ　221
第六章　令嬢の末路　272
終　章　軍属隷奴　299

ククッ…そんな貪るように浣腸器の先を咥え込んで……

か…ふ…あ…っ

館内の兵全員分の子種は美味だったか？

んひうっ♥

では俺への屈服の証に祖国の旗に腸内のザーメンをぶち撒けて見せろ

——ッ!? トスカー…タあぁ…っ！

貴様…っ 嬲り殺されたいか……ッ！

なぁに嫌なら堪えていれば良いだけだ

その蕩け切った身体を苛まれて耐えられるなら…だがな

やってやれ

ブッ…こっちビンビ

我慢すんなよぉ

本書では、1～3章末に見開きでのコミックを掲載！戦華たちの調教風景をさらに濃厚にお楽しみいただけます！

「んりゅぅぅぅ……はみゅっ、あむっ、んじゅぅ……んくぅっっ！　あふっ、ふぁ……」
快感を求めるように指に咥えつこうとしたが、それを止めるように彼の指が舌を摘み、歯を押し上げてあごを開かせる。だが解放されるわけでは、もちろんない。舌を引かれて体勢を崩しながら前のめりになる、そこには指の代わりに唇に咥え込むためのモノが、相も変わらずそそり立っていた。
（んぐっ、あぁぁ、らめっ……したいぃっ……想像、ひちゃったぁ……んんぅっ、思っちゃ、らめなのにぃぃ……したく、なっひゃうぅ……コシュコシュ、したいぃ……）
だがそれはできない、訓練中なのだから――そう思ってリリィは牡指を咥えたまま、唇を歪ませて劣情を押し殺そうとする。そんな少女の姿にニヤニヤと下卑た笑みを浮かべた司令は、満足げに頷き、跪く美少女の唇を指で撫で上げた。
「ははは、そうか……ふむ、そうだのう。本来なら許可できんところだが、訓練初日で我慢を強いるのも辛かろう――なにより、君は薬に蝕まれておるという事情もある」
悩む素振りを見せていたラディマスは、膝を軽く叩いて腹を震わせ、言葉を続ける。
「やむを得まい……特別に、自分で弄る許可をだそう。オナニーをしたまえ」
「んふぇ……んちゅっ、しょ、ら……い、いぃん、れふかぁ……んむちゅ……」
軍の任務、訓練においては甘さなどない。甘えはそのまま、戦地での死に繋がるからだ。それを誰よりも知っているはずの司令は、自分がそう問い返すと、柔らかく微笑んで頷いてくれる。誰よりも君を理解しておるよ――とでも、言わんばかりに。

「もちろんだとも……さぁ、遠慮などいらん。ただし、口を留守にはせんでくれよ」
（――んはっ、はぁっ……きょ、許可……いいんだ、自分で、しても……）
いつもの自慰での快感が背筋を這い上がり、ゾクゾクッと痺れるようにわなないた。
（う、嬉しい、優しいっ……浅ましいわたしなんかに、大佐……ぁ……っ……）
歓喜を示すように、リリィの瞳が細められてゆく。大佐の優しい言葉と指遣いに胸がキュンッと打ち震え、下着にこぼれる愛液がさらに大きく染みを広げた。その感覚に頬を染める美少女を見下ろしながら、ラディマスは言い含めるように告げる。
「ドリオの性奴隷は薬で暗示をかけられ、身体の感度を磨かれ、自らの意志でそれを求めるようにされるそうだ……君が受けたガスと同じ、重ねて摂取すると効果の上がる、少し中毒性を持つ薬をね」
そういえば――と霞んだ頭が僅かに動く。確かにあのガスには、そういう成分が多く含まれていた。
「そして深い暗示にかかれば、相手の言葉をおかしいとも思えなくなる。万が一にも、行為に夢中になって気づかぬうちに薬を盛られたりせぬよう、十分気をつけるのだぞ？」
「……は、い……気を、つけますぅ……んちゅ」
舌をくねらせて指をしゃぶり、蕩けた瞳でそう答える。その言葉といまの状態に、なにか関係があるのかもしれなかったが、ともかくいまは、訓練に集中しなければならない。
（そ……ふ……考え、るのは……また……）

そう思いながら、考えを端に追いやって次の訓練課題を待つ。と――。
「よしよし、ではそろそろ、奉仕訓練に入ろうか。先端にキスで挨拶し、丁寧にしゃぶりなさい……歯を立てぬよう、舌と頬肉で甘えるようにな」
「んくっ……ふぁ、ひ……仰せの、ままに……」
膝立ちで床に座ると、タイトミニスカートの軍服は簡単にずり上がり、曝けだされた股間が空気に触れた。ゾクンッと下腹部がわななき、敏感な部分に手を伸ばすと――ショーツにたっぷりと含まれた、いやらしい水分がクチュクチュと音を立てる。僅かにそれを押し込むだけで、布地から搾られた愛液が、指に湿り気を伝えた。
「ふぁぁ……んくっ、じゅるぅ……そ、それでは……ひ、ひふれい、ひまふぅ……んちゅっ、ちゅば……っっ、んくっ、くふぅぅぅっっ⁉」
鼻に込み上げる生臭さに脳を蕩けさせながら、恥垢に塗れる巨根の先端に、軽く口づける。刹那、電流のような痺れが口いっぱいに伝い、ショーツ越しの快感と相まって、背筋に甘い波がジュワリと広がっていった。膝が震え、支えていられなくなった身体は前のめりに、ペニスに頬擦りするような格好で、中年男の股間にしなだれかかってゆく。
（んはっ、はぁぁっっ！　な、なに、こえぇ……ぜ、全然、想像と……ち、違うぅっ……）
「おや、どうしたのかね。舌で丁寧に舐め、口に含んでもらわなければ困るぞ？」
荒い息を吐き、肉幹に唇を寄せたままビクビクッと肩を跳ねさせていると、ペニスの根元を掴んだラディマスが、恥垢を拭き取るように頬へ擦りつけてくる。ニチャ、グチャ…

…と嫌な音を響かせて、むせ返るような牡臭とともに汚辱が顔を包んだ。

けれど、薬に狂わされた身体と心は、その汚辱を快感にすり替え、臭気を香気にすげ替える。汚塊による打擲（ちょうちゃく）を受けているのに、秘唇からはいやらしい蜜が止めどなく溢れ、ショーツからもれて太ももを濡らす。その感触に頬を赤らめ、誤魔化すように唇を突き伸ばすと、リリィは再度、中年男のそそり立った肉塊へ口づけを、そして舌を絡めていった。

（こ、こんらぁ……あひゅ、い……熱い、なんてぇ……し、知らな、い……太くて、硬いの……知らないぃっ……んぉ、おい、ひぃのぉ……）

瞳がうっとりと細められるにつれ、口内の唾液もさらに熱く、量を増してゆく。

「んぁぁ……はぁうっ、あむぢゅぅぅぅっ！　んちゅっ、じゅるっ……ちゅっ……ちゅぱぁ……じゅっ、じゅるるぅっ、くちゅぅぅ……んれろぉ……」

調べて見知った知識を頼りに、亀頭の裏側の筋が浮き上がる部分を、舌先でチロチロとなぞる。唾液を塗りつけ、ゆっくりとそれをペニスの根元にまで伝い下ろすと、今度は根元から上へ、舌腹をペットリと肉幹に寄せて、舐め上げてゆく。舌いっぱいに広がる汗と恥垢の生臭い味、それが唾液と混じってお腹に流れ込む汚辱に快感を覚えさせられながら、リリィはショーツに滑り込んだ指先をくねらせ、潤んだ秘肉を掻き混ぜる。

「んぁ……あむぅっ、じゅるるぅっ……んくぷっ、ぐぷっ、ぐっぽぉぉ……」

蕩けた媚肉を細い指で撫でる、慣れ親しんだ感触なのに、迸（ほとばし）る肉悦が段違いだった。過敏な性感帯と化した粘膜に、欲望滾らせる牡肉が触れている――そう思うだけでも牝欲が

刺激される。しかもその唇と舌を絶え間なく擦られるせいで、上下の口で同時にオナニーしているようなものだ。

（……ひゅごっ、い……おひゃぶり、ひてるとぉ……お腹、奥ぅぅ……奥まで、キュゥンッてぇ……あ、熱くぅ、なっひゃう……んぐっ、じゅるっ、ちゅぽっ……）

熱い肉塊をペロペロと舐め、亀頭に吸いつき、リリィはいつしか夢中になって、大佐の巨根にむしゃぶりついていた。薄い唇を懸命に張りつけ、唾液でテラテラと濡れ光らせた肉棒を、傷つけないように口腔粘膜で包み、扱き立て、舌をタオル代わりに綺麗に磨き上げてゆく。その恥垢汚れはすべて口に流れ、胃臓に注がれてしまうのだが、汚辱よりも快感を覚え、身体の内側が熱く蕩けて仕方がない。

「んみゅぅぅ……んちゅぽっ、ちゅぽじゅぽっ、ちゅぱぁぁ……んぅぅっ、ちゅっ……ぷぁっ……ふっ、はぁぁ……んぁ、ちゅぅ……れろっ、ふぇおぉぉ……」

「うくっ、むふふ……なかなかに上手いのう。ならば少し、厳しい訓練といこうか……」

不意に頭を掴まれ、そんな言葉が頭に降り注ぎ、ビクッと肩が跳ね震えた。

「口と舌の動きはよいぞ、そのまま頬を窄めて……うむうむ、それでだな……ドリオの牝奴隷は、チンポを喉奥まで飲み込むのだ、こうやってな」

「んぐっっ、んむぅぅぅ――っっっ!?」

直後に、喉奥を抉る痛烈な刺激が、粘膜から脳へ突き抜ける。あの極太のペニスが肉傘であごを擦り、喉奥を犯しているのだと気づいたのは、胃がひっくり返りそうな感覚に嘔（え）

吐いてからだった。

「おぐうぅぅんっっ！　んむっ、おぼっ、あおぉぉ……あぐっ、んぐぐぅ……っ」

「おっ、おぉっ……ほぉぉぉ……ふ、ふふふ、いい表情だぞ、リリィくん？　こうされてもチンポを放さず、発情した瞳でいるのはたいしたものだ！」

ヒューヒューと鼻息をこぼし、涙をこぼしながらも頬を窄め、あり得ないほど深くまで唇を犯されながらも、しっかりとペニスの形を口に刻みつけていることが、恥ずかしくてたまらない。だが頭を引こうとすると、僅かに唇で肉棒を扱き擦ったところで再び頭を押さえつけられ、またもみっともない嬌声を上げ、喉を突かれてしまう。

（くひゅっ……くる、ひ……息、で、きな……っ）

息苦しく吐き気を催すほどの圧迫感に喉を押され、咳き込み、涎を吐きこぼさせられた。リリィは頭を振り乱して身悶え、そのたびに鼻からは、逆流した涎混じりの鼻汁がこぼれてしまう。だが、それでも――。

「ふみゅぅぅぅ……んぐぶっ、ぐぶぅっっ！　おぼっ、あおぉぉ……んふぐぅぅっっ！」

何度も夢想し、股間を擦って自分を慰めた膣姦の感覚が口いっぱいに広がるのを、拒絶できない。ショーツに入れて淫裂をなぞっていた指先どころか、股間を揉み解すように添えていた手の平全体が、愛液の受け皿になってドロドロに汚れてゆく。

（ほぁ、こっ……らろ、んぶじゅっ……ら、め……ひもひっ、よしゅぎぃ……じゅるぅぅぅ……ひんぽっ、ひゅごぉ……んひゅきっ、しゅきぃぃ……んちゅぅっ！）

モノのように乱雑に扱われ、頭を掴んで自慰の道具にされているように、無理やり唇でペニスを扱かされる被虐的、屈辱的な状況。それにもかかわらずリリィの身体はますます熱く火照り、肌着の下では肌という肌が赤く染まり、小さな乳首をしこり勃たせて甘い快楽を脳髄に染み込ませていた。

「んぶふぅぅっ、んぐっ、じゅるじゅるぅぅぅっ……ぐっぷ、ぐぽっ、ぬぽぉぉぉ……んぷぅっ……はぷっ、んれろぉぉ……ちゅぶっ、ちゅれろぉぉ……ぉん……っ♪」

自然と膣肉弄りにも熱が入り、いつしかリリィは自らの意思で唇を伸ばして中年男のペニスにむしゃぶりつき、口姦の甘い肉悦に溺れてしまう。

（はふぅぅぅ……お、オナニー、いいよぉ……おひゃぶりもぉ、ふぐぅぅっ……ゾクゾクッしちゃうぅっ！　もっ、と……止まん、にゃいぃっ……んっふぅぅぅ……）

喉奥を突かれながら、膣口周辺の蕩けた粘膜をなぞると、それだけで全身の感覚が開き、絶え間ない快感の痺れが背筋を這い回る。引き抜かれるペニスには上あごと舌を、先走りでドロドロにされ、いやらしく擦り上げられた。それに合わせて淫核を押し潰すと、目の眩むような快感が迸り、ビクンッと肩と腰が跳ねるのを止められなくなる。

（んはうぅぅっ！　だめっ、だめぇぇ――っっ！）

「んぐっ、んぅっ、んぎゅぅぅぅ――っっ!!」

膣口とお尻の穴を両方、リズミカルなタイミングでキュキュッと締めつけながら、背中を丸めて小さく跳ね、リリィの幼い身体は快感の頂に着地する。

「おおぅっ！　おしゃぶりでイッてしまうほどの牝素材とはな、これほどとは思っておらなんだぞ……むふふ、これは仕込み甲斐があるわ、本格的に滾ってきおったぞ！」
「んぐはぁぁぁ……おほぉっ、んぐぅぅぅっっ⁉　んぶっ、ふぐっ、んっくぅぅんっ！」
もはやそれはフェラチオではなく、口を使った普通のセックス――いや、普通の何倍も激しいセックスも同然だった。涎と先走りとを愛液代わりに、逞しい牡槍が窄めた頬と唇を何度も引っ掻いて、敏感極まりない淫核舌を捏ね回し、狂おしいほどの快感を注ぎ込んでくる。浅い抽挿で夢見心地の肉悦に浸っていると、喉奥を貫いて、暴力的な快感が口いっぱいに溢れ返った。
（あふぅぅぅっ……あはぁっ、はっ、ま、まはっ、イクッ……んぃっ、イクッ、イクイクゥッ……んんぅぅぅっっっ！　あくっ、くるぅぅっ……んひぅっっ！）
軽い絶頂を何度も味わい、そのたびに股間から雫を撒き散らして痙攣し、床に水たまりを作ってしまう。アクメの快感はさらに口腔を敏感にし、鼻息を荒くさせ、唇をはしたなく突き伸ばさせた。そんなみっともない顔を眺められることが、恥ずかしくてたまらないのに、気持ちよさにますます奉仕は激しくなり、快感は熱く染み込んでくる。
（ひやっ、らめっ……み、みらいれぇ……こ、こぇ、訓練、らからぁ……ひ、ひかた、ないんれふ……たい、は……大佐、大佐ぁっ……んぅっ……）
快感を与えてくれる牡に屈し、瞳がトロンと淫らに歪み、発情に染まりきっていた。そんな少女の牝の表情にニヤリと笑った大佐は、リリィの後頭部をしっかりと掴んで引き寄

せ、ソファから腰を浮かせて思いきり腰を叩きつける。
「ほれ、リリィくん！　頬を窄めて頭を振れ！　バキュームでチンポを吸い上げろ！」
――グチュグジュゥゥッ！　ジュプッ、ジュブッ、グチュンッ！　ジュボォォッ！
「んぐふぅぅぅっっっっ⁉　んぁっ、ひっ……ほむっ、おぐっ、んぼぉぉぉっっ！　おほぉぉぉっ、はぁっ、んおぉぉっ……んくふっ、ふはぁぁぁ……」
苦しいのに、吐きだしたいのに。
激しく喉を突き抉られると、下腹部の底がキュンッと切なく痺れ、喉の粘膜が蠢動してペニスを擦り、牝の本能が求めてしまう――牡の生命の証を。
「はぁおっ……おむぅぅぅ……じゅるぅっ……」
「よぉしよし、このままくれてやるぞ……喉から胃まで、直接注ぎ込んでくれるっ！」
長大な肉棒に喉を抉られ、鼻先を陰毛でくすぐられながら、緩やかな腰遣いを受けて頭が真っ白に染められる。それと同時、ラディマスの腰が小さく痙攣し、口いっぱいに詰まったペニスがさらに大きく膨張、先端の震えを粘膜に伝えてきた。
（はぁ、めへぇ……こ、これ、らはれたらぁ……あみゅっ、んっ、も……もろれ、なくぅ……心も、れ、れんぶぅぅ……も、持って、いかれひゃぅぅっっ……）
霞んだ思考がそんなことを思うも、射精の兆候を唇に感じてしまうと、もうたまらなかった。固定された頭に腰が押しつけられ、肉棒が大きく跳ねるのを感じたリリィは自然と、頬を窄めてペニスを柔らかく包み、本能のままに強く吸い上げる。

触手に犯された儚い唇からは、絶頂のたびに感極まった喘ぎがもれ、少女の瞳がトロトロと淫蕩に染まってゆくのが見えた。その視線とサイネリアの視線が絡み合うと、彼女は頬を真っ赤に染めて顔を背け、見ないでと訴えるように小さく頭を振る。

「リ……リィ……んくっ、くあぁぁっっ⁉」

そんな仲間を気遣い呼びかけようとした、その瞬間。緩やかに乳房を責め立てていた触手が、不意に奇妙な動きを見せた。乳丘の麓をキツく締め上げたまま、細い触手がブラの隙間に滑り込み、乳肉の頂上へとぐろを巻くように張りついてくる。

白肌よりも数倍過敏な乳輪に、粘液が絡みついて擦られる。その刺激に合わせて肛門襞がくすぐられると、意識はたちまちそれらの性感帯へ釘づけにされ、上向きの秘口から淫らな雫が弾けた。

「ふぁっ、はっ……んぅっ、やめ、な、さ……」

快感に紛れながら、リリィの衣服をそうしたように、レーザーナイフを搭載した触手が服の上を這い回る。ミニスカートの左右には深いスリットを入れられ、ショーツも切断され、淫唇を見せつけるような大股開きを披露させられた。

軍服のジャケットは、下のブラウスごと袖を切り取られ、ノースリーブを強制される。丈も短くカットされ、脇腹もお臍も丸出しの軍人らしからぬファッション。少しずつ露出を増やされ、柔肌を晒される羞恥に、腰を捩って悶えずにはいられない。

「うくっ……うぅっ、い、やぁっ……」

牝としての自分を晒しものにされ、あらゆるアングルから撮影されたという事実が、サイネリアの心を萎えさせていた。抵抗したいのに、菊壺を犯す機械触手がうねるだけで、恥ずかしい己の姿を思いだし、弱気な言葉が飛びだしてしまう。

『ひひっ、すっかりしおらしくなりやがって！』

『だがここからだぜ……待たせた分たっぷり、そのデカ乳可愛がってやるからなぁ！』

「ひっっ！　やっ、やめっ……いやぁっっ！」

彼らの食指が乳房に向くと同時、触手がブラの内側でグチュグチュと粘液を撒き散らした。その動きにビクッと腰が跳ね、表情がサッと青く染まる。

（だ、めぇぇ……そこ、だけはぁっ……んふっ、ふぐぅぅっ……み、見ない、でっ……）

豊満な乳房の形に沿って、大きな穴が開けられた。ショーツと同じく、艶やかな紫色をしたHカップのブラが、白くたわわな豊乳を包んで転び出る。

『うひょおおっ！　でけぇなぁ、おい！』

『きっひひ、てめぇも期待してたんだろうが！　デカパイ乳首も、随分と――おぉ？』

不意に止まった男たちの声、そして直後に聞こえたザワつく気配に、鼓動がドクドクと高鳴りだしていた。身体中に脂汗が滲み、呼吸が荒く乱れてゆく。

（っっ……ぁ、あ……あぁぁぁ……い、やぁっ……こんな、ことがっ……）

子供の頃、士官学校に入るより以前からDカップはあった、サイネリアのコンプレックスの塊。だが根本の原因はサイズではなく、人とは違う形状の、ある部分――そこへ彼ら

の視線が次々と集まっているのを感じ、燃え上がる羞恥に頬が赤く染まった。
『あんだけイキまくってんのに、妙だな……勃ってねぇはずがないんだが……』
『おいおい、コードで押さえてんのかぁ？』
これまでの多くの女性はそうだったのだろう、けれどサイネリアのブラには、快感に勃起した乳首の形がまるで浮かんでいない。訝しむ男たちの疑問に応えるように、レーザーナイフがブラ紐を切断し、一本の触手がカップを摘んだ。そして――ゆっくりと時間をかけ、焦らすように持ち上げてゆく。
「あひっっ……ふぐぅっ、んっ、くっふぅぅぅっ……んんぅぅっ……」
悲鳴を上げそうになるものの、なんとか唇を噛んで、それを堪える。だがそれは快感に抗えたわけではない、サイネリアに残された僅かな矜持が、意地を見せただけだ。
（み、られ、て……いますのねっ……あぁぁ、いやぁぁぁ……っ）
スピーカーからの声がシンと静まり、固唾を呑むような息遣いが聞こえる。だが視線は、大振りのメロンを思わせるほどの乳球、その先端に痛いほど突き刺さっているのが、はっきりとわかった。張りつめた肌に触れる空気の感触が、冷たく研ぎ澄まされてゆく。
『っ……ぎゃはははははっ！　なんだありゃあ！　乳首がへこんでやがるぜ！』
『ひゃーははは、さすが戦華様だなぁっ！　お美しい陥没乳首をお持ちのようで！』
「――くふぅっっ！　ふっっ、ぐぅぅぅぅっ……くっ、あぁぁっ……」
コンプレックスをはっきりと揶揄するその言葉に、サイネリアは耳まで赤くなって、心

の奥と頭の中で、激しく身悶えさせられていた。男たちの指摘するように、軍服美女の乳頭は桃色の乳輪へスッポリと収まったように窪み、外部からは先端さえも見えない。

『おいおいおい、とんでもねぇエロ乳だなぁ！』

『見目麗しい戦華様に、こんな秘密があったとはなぁっ！　もっとよく見せろぉっ！』

揶揄の叫びに屈辱を覚えながらも、サイネリアはプルプルと身を震わせ、唇を噛むしかなかった。白い肌は発情で上気しているのに、それを上回るほど色づいた濃い桃色の乳輪が、乳房の頂点に咲き誇っている。その部分を誇示させるように、機械触手が受け皿となって乳肉を持ち上げ、たわんだ下乳が淫肉の柔らかさを強調していた。

とぐろを巻いた触手に乗せられ、揺すられるたびに、乳房がタプタプと揺れ躍る。それだけでも恥ずかしくてたまらないのに、突起が埋没し、窪んだ乳首穴を覗かれるのは、女としてのプライドを根こそぎ奪い取るほどの恥辱だった。

（んくっ、くふぅぅぅ……揺れると、振動がぁ……ち、乳首に、ビリッて……あぅっ！）

陥没した乳球の奥で、硬くしこり勃った乳首の感触が、自分にははっきりと伝わる。触られてもいない部分で感じてしまう己の浅ましさに恥じ入りながらも、乳内へ広がる甘い快楽には抗えず、肛門への刺激と相まって、足先がビクンッと跳ねた。

（ほんっと……なんて陰湿なんですのっ！　戦いは下手なクセにっ……こんなっ、こういうことだけ……女を辱めることだけは、こうも得意だなんてっ……んくぅっ！）

『へっへへへ、デカ乳輪がエロすぎるぜ……』『さぁ～て、ホジホジしてやるかぁ！』

そんな美女軍人の姿に欲情でもしたように、彼らの操る触手群が乳房へ襲いかかり、例の小さな吸盤をあちこちに張りつけ、吸い上げてくる。

「あいひぃぃぃっ！　んひゃっ、な……なにをっ、んおぉぉっ⁉　くひあぁぁぁっ！」

ほんのり朱に染まる白肌へ、次々と針の刺激が迸り、粘液をベットリと塗りつけられる。ドクドクと脈打つ鼓動に合わせ、身体中に粘液の成分が染み込む感覚――意識せずとも乳房の先はたまらなく敏感に研ぎ澄まされ、触れられてもいない乳輪は、さらに厚みを増してプックリと膨らんでしまった。

「んひぎぃぃっ、ひゃっ……はひっっ、んひぃぃぃっっ！」

剥きだしになった豊乳の根元が、ギチギチと締まるほど強く縛り上げられる。だが、薬によって快感に馴染んだ乳房はその痛みにさえ悦び、締めつける触手に擦られて、強制的に快感を享受させられた。硬く屹立しながらも埋まったままの乳首は、周囲からの甘い快楽を受けて何度も躍動し、乳房の内から熱い疼きの波を、重く絶え間なく広げてゆく。

（だ、めぇ……あぅぅんっ……い、いけませんわぁ……また、これでイカされ――）

身体中の毛細血管がドクドクと脈打ち、ほとんど触れられていない淫唇からは、すでに透明の雫が止めどなく流れ、粘膜襞を淫らな桃色に染め上げていた。白濁した牝汁までが淫口の奥から溢れ、牡を求める貪欲な本能をモニターに曝けだす。太い触手を大口開けて咥え込み、緩やかな抽挿を受けて卑猥な痙攣を見せつけるドロドロの肛門皺も、その数が数えられるほどのアップで映しだされていた。

ただ――それらから、サイネリアを絶頂へ導く決定的な刺激はもたらされない。彼らの狙いは元よりその部分――熱く疼かせるだけ疼かせ、触れようともしなかった乳輪と、埋没する乳急所へ、満を持してのタイミングで機械触手が這い伸びる。

「んひゃっ、ひゃふっ……ひっぐぅぅぅっっ!!」

粘液塗れの機械触手がとぐろを巻いて、過敏になった肉厚乳輪を舐め包み、先端部で円を描くように圧迫した。それだけで感極まった艶声をもらした瞬間、鋭い痛みが猥乳の頂点に咥えついてくる。

「あひぃぃぃぃ――っっ!? んぐっっ、くっふぅぅっ……んひゃふぅぅぅっっ！」

膨らみ、張り裂けそうな肉悦を蓄えて震える乳輪が、針の刺激と粘液の染み込みにビクビクと躍動し、倍以上の大きさに膨らんでいるようだった。頭の奥が痺れ、瞳が蕩け、淫唇からは卑猥蜜がボタボタッと勢いよく溢れ出る。それらを塗りつける柔らかな刺激が股間を襲い、同時に乳陥没の隙間へ細い触手が滑り込み、奥の肉勃起へ蹂躙の爪を立てた。

（くひぃぃぃんっっ!! ひょ、んらっ、ひくびはぁぁ……ら、めっ、わらひ、わらひもぉぉ……弄ったこと、なっ……なぁっ、なひっ、のぉぉっっ！）

入浴時、ほんの少し気にかける程度にしか、刺激を与えたことのない陥没乳首。その隙間が触手の群れに大きく開かされ、注ぎ込まれる空気に舐め上げられる。粘液の影響なのか、その刺激だけでも豊乳が震え、胸の先端から甘酸っぱい疼きが乳房全体へ染み渡っていた。乳首が切なく震えると、捻じ込まれた極細触手の先端にカリカリと擦れ、狂おしい

ほどの快感を孕む。その刺激に、サイネリアは自然と腰を振り乱し、淫臭と牝液を振り撒き、激しく身悶えさせられた。
「ふぐぅぅぅっ……んっっ！　くっはあぁぁぁぁっ、あひぃぃぃんっ！」
『ほ～れほれ、抵抗しねぇのかぁ？』
『だしちまうぜ、サイネリアちゃんの恥ずかしがり屋なエロ乳首をよぉ……くひひっ』
彼らの狙いをはっきりと口にされ、その視線を陥没の穴淵に痛いほど感じる。
（うぁっ、あぁぁ……や、です、わっ……剥きだされて、しまうっ……わ、わたくしのぉっ……わたくしの、乳首いぃぃ、あぁぁっっっ！）
乳丘に埋もれた状態でも、その中でニプルがどれほど硬く尖り立ち、解放を求めて疼いているか――それをはっきりと自覚できているからこそ、なおさらそれを人目に晒すことが我慢ならなかった。
「いっ……やっ、いやぁっ……うっ、あぁぁぁっっ！　んんぅぅぅっっ！」
陰唇や肛門と同じく、乳首の陥没穴までが大口を開かされ、触手に齧りつかれたニプルが引きずりだされる。敏感な突起へ甘く食い込んだ金属の感触に、腰が跳ね震え、双穴から大量の雫を迸らせながら、サイネリアは快感とも苦悶ともつかない悲鳴をもらした。
「はぁぁぁっっ……こ、こぉっ……こんらっ、のってぇぇ……あり、ませんわぁ……」
穿り返され、大写しになった乳首は小指の先端ほどの小さな肉粒で、ほんのりと桜色に色づき、震えている。その先端の数カ所に、金属触手が揉みしだくような甘噛みを繰り返

していた。細触手も絡みつき、小さな吸盤が勃起乳首の表面を隙間なく吸い、チクチクと針刺激を注ぎ込む。襲いくる痛みと快感で、完璧に発情させられた過敏な性急所は爆発的な快感を生み、サイネリアは踊るように腰を跳ねさせ、捩り、淫液を迸らせた。

『ひひっ、乳首だけでもイッちまえそうだなぁ、淫乱軍人が！』

男の叫びと嘲笑、それに合わせ金属触手が敏感な突起を縛りつけ、咥えついたまま思いきり引き上げる。重い乳房肉と触手口に綱を引かれ、痛みと衝撃が胸奥に突き抜けた。

「んぐきっ……ひゃ、めっ……いひぃぃぃんっ！　ひょれぇぇっ、ひぎぃぃぃぃっ！」

無数の吸盤、細針の生えた触手は、刺激に対してあまりに脆弱な陥没乳首をギチギチと締めつけ、痛みを伴う圧倒的な快感を注ぎ込んだまま、激しく扱き抜いてくる。同時に、反対側の陥没穴を乳房へ埋めるように、太い触手が突き立てられた。柔乳をひしゃげさせながら、埋没乳首を杭に見立て、触手が何度も乳肉を叩き捏ねる。

「ひきゃっっ――んっひぃぃっっっ⁉　んっくおぉぉぉんんっっっ！」

しかも、触手の先端は細く短い触手群が生え、ブラシのような形状になっていた。埋まった敏感乳首の頂点は、無抵抗なサンドバックのように無数の触手で叩かれ、四方八方から嬲られ、擦られ、舐められ――乳肉が蕩け落ちるほどの、甘く熱い快感を孕み、乳奥へ染み込ませてゆく。

「こへぇぇぇっっ、こんらっ、こんにゃらめぇぇっっ！　いひぇっ、ひへっ、あへぇぇぇっっっ！　いっひぃぃぃぃ――っっっ！」

もちろん、それらの刺激を与えながらも、粘液は途切れることなくブチュブチュと噴きだし、胸全体がドロドロに濡れ汚されていた。研ぎ澄まされた過敏な性急所へ、強めの刺激と新たな媚薬を執拗に擦り込まれ続け、サイネリアは取り繕おうとする意思さえも容易く剥ぎ取られてゆく。快感に下半身が震え、筋肉は締まりを失ってカクンッと脱力し、吊るされた四肢も肉体も、すでに彼女の意思を伴わない反射だけで跳ね躍っていた。

（ひはぁぁっっ！　んんぅぅっ、おっぱい、らめぇぇっっ、あぁあぁぁっっ！　いぐっ、イッひゃうぅぅっ！　んくひぃぃっ、ひくびっ、ジュポジュボしないれぇぇっ！）

電流でも流されたような凄絶な快感に、おもらしと紛うほど大量の牝雫が、滝のように流れ落ちる。それらはすべて、乳首への責めのみで生じた、美女軍人の牝恥の証だった。

『くひゃひゃひゃ！　何回見ても飽きねぇなぁ、女が無様に悶える姿はよぉっ！』

『エロ乳と一緒にケツ穴も、マンコもクリも弄ってやりゃあ、どうなっちまうか！』

（だめぇぇっっ！　そぇっ、そんりゃ、のぉぉ……れっひゃい、りゃめぇぇぇっっ！）

快感に翻弄され、大開きの瞳から涙をこぼし、イヤイヤするように頭を振り続けるサイネリア。だが、それだけの無様さを見せても、彼らはまだ満足してくれない。それどころか、イキ狂いながらも拒絶するような責めをすればどうなるのか――その姿を見せろとばかりに、欲望を滾らせたようだった。

「んひぎぃぃぃっっ……あぁうっ、あぅっ、うしょ、れひょぉぉ……あぎぃぃっ！　んひっ、ひゃ、めへぇぇ……あうぅぅっっ！」

「ふふふ、頑張るではないか。さて、これですべて入ったが……どうかなぁ、ツバキよ。この緩みきったケツ穴で、液体を支えきれるものか？」
「ふぐぅんっっ……んっ、おぉぉおっっ……」
筒が引き抜かれかけると、吸いつくように張りついた肉皺が引っ張られ、隙間からピュルッと薬墨がもれるのを感じた。肛門からなにかをもらす、その瞬間までが天井に大きく晒され、ますます赤く、表情を恥辱に染めながらも、ツバキは全身を叱咤して括約筋を引き締める。なんとか液体がもれるのは収まったが、きつく筒を噛み締めれば噛み締めるほど、薬液に染まった粘膜が狂おしいほどの快感を生み、ツバキの脳に牝の思考を刻みつけてゆく。この感覚が、性悦であると。
（こ、こん、らぁぁ……ありえ、んっ……わ、わらしがっ、こんな……お尻、でぇっっ！）
「よし、その調子だ……くくっ、ふははは！　すぐに栓をしてやる、我慢していろ！」
「んひっっ……ひゃうっっ、あひはぁぁぁっっ！」
チュルンッとゼリーが落ちるような滑らかさで、ガラスの感触が肛門から抜け落ちる。擦られた椿の淫紋が電流にも似た刺激を迸らせ、尻肉を跳ねさせた。その衝撃に後押しされ、またも顔中に、自ら溢れさせた淫らな汁が浴びせられる。汚辱と羞恥に、思わず瞳をギュッと閉じた――その瞬間だった。
「んぎぃいっっっ⁉　ふひっ、ひぃいっっ――ひあぁぁぁぁっっっ！」
――ツプッッ……ズブニュゥゥッッッッ！

括約筋が簡単にこじ開けられ、筒型の硬いなにかが、お腹の奥に捻じ込まれる。相当に太いらしく、溢れかけた薬液をすべて腸内に押し戻し、注入されたときと同じような苦悶を感じさせられた。ツバキはたまらず大口を開き、舌を突き伸ばして喘ぎ悶える。

「はおぉぉぉっ！　んぉっ、はっっ……ほあぁぁっ、あおぉぉぉぉっ……」

（はひっ、はひってぇぇぇっ！　なんっ、ら……なんらっ、こ、これはぁぁぁっっ！）

生き物のような熱さはない、なにかの器具だろうか。潤滑油と弛緩によって肛門襞は貫通したものの、狭まった腸肉は異物をギチギチと締めつけ、圧迫感に息が詰まりそうだった。しかも過敏に変貌させられた菊肉は、締めつけによって異物に擦れる感覚さえも快感にすげ替え、またも足先まで痙攣するほどの、甘い波に全身が満たされる。

ブシュゥッ、ブチュッッとけたたましい水音を響かせて、膣肉の奥から弾けた牝蜜が降りかかるも、もはやそれに構う余裕すらない。瞳は見開かれ、大口は荒い呼吸を繰り返し、拘束を軋ませながら腰がカクカクと、淫らなダンスを披露していた。

「ふはははは っ、よく我慢したなぁ、ツバキよ！　褒美にケツ穴をたっぷりと掻き混ぜてやる……排便のたびにイキ狂えるよう、腸肉の隅々にまで薬墨を染み込ませてやる。その調子で喘ぎ踊るがいい！」

王の下卑た声を耳に聞き、反発心が芽生えるけれど、そこまでだった。挿入された硬い張り型を上下に揺すられ、咲き広がった椿の華と、蕩けた菊壺内を蹂躙されると、屈辱を上回る快感の波に、瞳がだらしなく垂れ落ちてしまう。肛門を犯し抜く張り型が、男の操

作でグングンと伸びだし、直腸を貫いてS字結腸まで達する。薬墨を塗り広げていても、止めることさえできない。紅色に染まる肉皺を限界以上に引っ張られたまま、それを天井に大写しにさせ、アヒアヒと喘ぐことしかできなかった。

（くほっ、んひふぅぅっ……ふっ、ひゃっ、めぇぇぇ……いぃひぃぃぃっっ！　んひっ、お、おくに、んぐっ、ぐ、ぐるぅぅぅっ……あおぉぉぉっ！）

張り型が腸壺を串刺しにするたび、広がった椿の華から垂れる花蜜のように、異物と粘膜の隙間から薬墨がプチュンッと噴出される。そこには薬だけでなくツバキ自身の分泌液も染み込んでいるのか、溢れたそれが辺りに飛び散り、また自身の顔にかかるたび、卑猥な甘臭さを鼻腔に広げていった。

（はふっ、ふぅぅぅぅっ！　んぐっ、あっ、あぁぁぁぁっ！　だめっ、だ、だめぇぇぇっ！　はぁっ、あづ、いぃっ……お、ひり、かわるぅぅっ……）

排泄器官を性感帯に書き換えられてゆく、その感覚が張り型の抽挿に合わせ、王の言葉通り、腸壺の隅々に染み込んでゆく。細かな凸凹やコブのついた張り型が腸肉を擦るだけで、頭の中が瞬く間に白く染まってしまう。開ききった陰唇と尿口の奥からは、無味無臭の液飛沫がジャッ、ジャッッ、ブシュゥッ！　と噴きだして、顔と髪をグシャグシャに濡れ汚していた。

（ふっ、あぁっ……こ、ぇが……あうぅぅっ！　ひ、がぇっ……うぅぅっ……こ、こへぇ……んくっ、くす、りのぉっ……せぇ、らぁっ……）

歯を食い縛って声だけはこらえようとしても、張り型がうねって肉皺を撫でると、お尻の奥を擦られた数倍の快感が脳天を貫き、伸びきった四肢がビクンビクンと痙攣する有様だ。筋弛緩の効果も相まって、完全に抵抗を放棄した括約筋は、もはや張り型に粘膜を吸いつかせる役目程度しか果たしていない。抽挿に合わせて椿の華は盛り上がり、もしくは萎んで陥没し、そのたびに強烈な快楽が尻肉全体を満たして痺れさせ、さらに抵抗を薄れさせていった。

「いひはぁぁぁ……ふぐっ、おっ……んはぉぉぉっ！　ふぐっっ、いひぃぃぃっ！」

だが、おとなしく身体を弛緩させても、敵王の肛門淫虐は止まらない。まるで本物のペニスが抽挿されているのと変わらないような、淫らな技巧を用いて張り型が蠢き、腸壺の感じる部分を的確に抉り、擦り上げてゆく。そのたびにツバキの足先はピンと伸び、肛門は呼吸するようにヒクついて異物を咀嚼し、表情は甘く蕩けだしていた。

（んっなはぁぁぁ……なん、へぇ……んふっ、くぅぅっっ……こんなっ、緩やかなぁぁっ……くっ、おっ、うぅぅっっっ！　奥がっ、疼くうぅぅぅっ、あぐおぉぉぉっっ！）

張り型が引かれるたび、ツバキの尻房は無意識に動き、尻穴を卑猥に蠢かせ、吸いつかせる。自らの反応には気づかず、男たちがそれを見て嘲笑を浮かべていることにも気づかず、腰を震わせ汁を噴きだし――いったいどれくらい、腸粘膜を責め立てられただろう。

数十分か、下手をすると数時間か。思考が霞んで全身が痙攣しだした頃合いになり、ようやく王の手が止められた。

「ふふふ、この程度で十分だろう……さて、馴染んだケツマンコの味はいかがかな？」
トスカータが呟くように告げ、強引に張り型を引き抜いてゆく。粘液か腸液か、もはや判別もつかないドロドロに泡立った粘液が絡みつき、開ききったツバキの尻穴との間に、卑猥な粘液糸をベトォォォ……と引いて、艶めかしく濡れ光った。
（んはぁぁぁ……はふっ、んっ……もぉっ、ど……どぉ、なっれぇ……あぅんっ……）
霞んで途切れながらの思考でも、なんとか現状を把握しようとツバキの理性は働く。だが天井のモニターを見た瞬間、そこに――。
「あっ、うぐっ……うっ、あぁぁぁ……」
二本指で作ったリングよりも遥かに大きく開ききっている、尻大穴を映しだされた挙句、それを愛らしく彩る卑猥な椿――己の名を冠する華の淫紋を見せつけられ、心が悲鳴を上げた。さらには、その穴の奥で犇(ひし)めき蠢く、元の腸肉の薄桜色より、遥かに濃く毒々しく色づいた粘膜を目の当たりにし、それまでの快感とで、情報が統合されてしまう。
（わ、私の、か……らら、あ……ぐぅっっ……）
ドリオの淫薬によって肛門から直腸の奥までが、取り返しのつかない状態に改造されてしまった、という事実に――。
「ぐふっ、ぐはははは！　随分とおとなしくなったなぁ、戦華よ！」
そう蔑まれても、ツバキはまるで反応できず、呆然としてしまう。敵に捕まり、排泄器官を性感帯へと改造される――そんな恥辱は想像だにしなかった。我が身に起こったこと

が、敗北の結果だと見せつけられ、悪夢のような現実に頭が揺れる。
「だがまだだ。俺が味わった苦悶、お前にもはっきりと伝えておいてやるぞ――その淫らな穴になぁっ！」
「――なっ、にを……する、気だっっ……」
呂律が回ったのは奇跡だった。それを見た瞬間、ツバキの歯の音はカチカチと小さく鳴りだし、呼吸が詰まるような衝撃が走る。
晒した股間にそびえる逸物の先端を、トスカータは体勢と手の力でグッと支え、開ききった不浄淫穴へと向けた。感覚で理解できる張り型のサイズなど比べ物にならない、棍棒のような太さでゴツゴツと張りだし、無数の血管が脈動しながら張りついて、その異様さをさらに強調している。
（こん、なっ……に、肉塊が、まさかっ……）
単語だけは知っていたが、こんなにも醜悪な塊とは思いもよらなかった。初めて目の当たりにした男根に、思わず瞳を見開く。それがジリジリと肛門に近づくのを見て、背筋がゾワァッと総毛立った。
「なぁ、ツバキよ……ここでお前が泣きじゃくり、この俺に一生の忠誠を誓う、裏切り牝犬となる――そう宣言すれば許すと言えば、どうする？」
「なっ――んふぅっ、ふぁっ、ひぅっっ……んっぐぅぅぅっ……」
拳のように大きな、ゴツゴツとした亀頭が肛門を抉り、椿の淫紋に狂おしい快感を注ぎ

込む。その弱々しくも甘い刺激だけで尻肉をはね上げ、足先を震わせながら――それでも懸命に歯を噛み締め、ツバキは言い放った。

「き――貴様の、男根ごときに蹂躙されようと……毛ほどの屈辱も感じぬと、言ってやるだけだっ！　この程度で臆する兵など、我が国には一人たりとていない！」

「――ふっっ……ふはははははっっ！　そうだ、それでこそ俺の知る戦華ツバキだ！　存分に楽しませてもらうぞ、まだ夜は始まったばかりなのだからなぁ、お前の調教初夜だ！心地よい声で啼け！」

卑猥に歪められた椿の華に、おぞましいほど巨大な肉塊が迫る。グチィィッ！　と肉を軋ませ、艶穴をさらに広がらせ、排泄とは反対になる圧力が菊壺を蹂躙してゆく。

「んっっっ……ふううぅぅぅ――っっっ⁉　いひはっ、はっ……あぅっ、あぁぁっ……んっ、んくぅぅっっ！　くひっっ、あひぃぃぃっ！」

「ひゃはははっ！　見ろよあの顔っ！」「苦しそうに歪んだ直後だってのに、もう気持ちよさそうに蕩けてるじゃねーか！」「もうケツ堕ちかよぉ！」

男どもの嘲笑を耳にしても、もはや屈辱さえ覚えない、そもそもその声が耳にまで届いていないようだった。熱い脈動はまるで、鉄杭を打ち込んでいるように粘膜に疼きと痺れを広げ、どこまでも快感の渦を大きくし、ツバキの肉体と精神を甘く蕩かしてゆく。手も足も先端がキュッと丸まり、快感の受け入れ準備を万全にして、肉塊が押し進むたびに、全身がビクビクッと跳ね躍らされていた。

（こほぉおぉおっっ！　こぇっ、ひゃっ、らめっっ……んんぅぅっ！　お、おひり、こわれぇぇっ！　さっきの、と、れ……全然、ひが、ふっっ……）

奥深くまで蹂躙し、結腸にまで性感帯を広げたものとは確かに、深さは異なる。けれど太さと、生き物らしい蠢動と熱さはあれの比ではなく、そのことが犯され、感じさせられているという実感をさらに強くしていた。前の穴も後ろの穴も、蛇口が壊れたような勢いで愛液腸汁を夥しく吐きもらし、頭の奥は激しく明滅を繰り返している。

（ほ、ほん、ろっ……おかひっ、おかひくなるぅぅっ！　んはぁぁっ、はぐぅぅっ！）

なによりも強烈だったのは、叩きつけられる腰の勢い、奥まで突き破られるような凄まじい衝撃だ。バツンッッ、ブチュンッッ！　と粘膜同士が吸いつくように密着し、粘液を絡めて擦れ合いながら、肉槍が尻奥を穿ってゆく。刺激は腸肉を震わせ本能を揺らし、引き抜かれるたびに生きた躍動が遠ざかる、その喪失感があり得ないことに、尻穴奥に狂おしいほどの切なさと疼きを広げていた。

（あぐぅぅっっっ！　んぁっ、なんっ、れぇぇぇ……ひぐぅぅっっ！　あぁぁっ、やめろぉっ、掴むなっ、こひぃひぃぃっっ！　パンパンッ、するなぁぁっ！）

薬液をたっぷりと染み込まされた、新たな性感帯となった不浄壺を余さず捏ね回され、ツバキは苦悶と快楽に表情を歪ませながら喘ぎ震える。その声は、男の股間に尻肉を打擲されるたびに甘く上擦り、媚びるような吐息を跳ねさせていた。ピンと伸びきり、爪先を震えさせる黒髪美女の美脚は、はしたなくガクガクと痙攣し、切なげに内股へ捩れる。

（んふっっ、くふぅぅぅっ……あぁぁっ、やめろぉぉっ、奥っ、こしゅれるぅぅ……）
拘束のせいで不自由な動きしかできず、込み上げる快感をやり過ごすことができない。それどころか身体を捩るたびに括約筋に力が入って、咥え込まされた牡肉を目いっぱいに噛み締めさせられ、そこから流れ込む刺激が、無意識に肛門を締めつけさせる。
「んぐっっ、いあぁぁぁぁぁ――っっっ！　んっふぅぅっっ、ふぐぅぅぅっ……」
キュッと締まった尻穴で牡槍を噛み扱くと、その強烈な擦過快楽が腸奥に弾け、脊髄を駆け抜け、脳天に火花を散らした。たちまち大口を開いて、舌を伸ばしてはしたなく叫びながら、男に組み伏せられたツバキの喉奥から、感極まった艶声が迸る。
「んっっ、ふぅぅぅっっっ！　んぁっ、あぁぁっ、あぁぁぁぁっっ！」
「おぉっ、すげぇすげぇっ！」「あの澄まし顔の女が、ドロドロのエロ顔になってら！」
男たちの歓声が響き、それをツバキに教えようというのか、カメラとモニターがツバキの眼前へ向けられた。映しだされた表情は瞳を垂れ下げ、真っ赤に火照った、これまで彼女が助けた幾人もの女性たちと、まったく同じ表情に感じられてしまう。
（ひっ、はっっ……ひがぅふぅぅっっ！　わ、わらひっ、はぁぁっ……エロ、がおっ、なんへぇぇっっ！　しへっ、ないっ……してないぃぃっ、んくぁぁぁぁぁっ！）
目の前の光景を否定する美女軍人は、瞳を強く閉ざし、黒髪をほつれさせて頭を振り乱し、これは自分でないと心に言い聞かせる。しかし容赦のない敵国王の腰遣いは、締めつけられた尻穴を再び大きく掘削するように、野太い肉幹を奥まで捻じ込んでは引き、張り

だした亀頭の肉傘での腸壺開墾を繰り返した。
——ズグチュウッッ、ヌチュッッ、ジュポッッ、ジュボォォォッッッ！
「ふぐぃぃぃっっ⁉　んらあぁぁっっ、おふっっ、んばっっ、ふあぁぁっ！」
突き抜ける刺激に瞳が大きく見開かれ、口端からは涎の飛沫を撒き散らし、美しく整った眉根が艶めかしくひそめられる。そんなツバキの反応と表情を眺めながら、ゆっくりと体重をかけて肉棒を押し込み、敵王が喉奥から笑いをもらした。
「くっくくく、もうイキそうな顔をしおって……いや、とっくに身体は絶頂しているな。お前がそれに気づいていないだけだ」
（なんらぁぁ……なに、ひ、ひってぇ……りゅっ……ふぅぅぅっ……）
問い質すために口を開くこともできず、獣の咆哮じみた嬌声をもらし、全身をビクビクッと痙攣させて悶える。身体の中心が蕩けたように脱力し、淫裂が愛液を滴らせ、垂れ流させられていた。卑猥な割れ目で呼吸でもしているかのようにパクパクと開閉を繰り返し、そんな自身の反応を見せつけられ、ツバキの表情はカァァッと真っ赤に染まる。粘っこい愛液を浴びた顔中が淫らに濡れ光り、緩んだ唇からは、熱い吐息が溢れだしていた。
「ほおぉぉぉっっ、おぐっ、んんおぉぉぉっ……はぁっ、んふぅぅっっ……」
ペニスが叩きつけられるたび、尻肉を震わせて腰が跳ねる。その尻肉と太ももを掴んで腰を押しつけ、トスカータが吠えた。
「そぉら、奥まで食らわせてやるぞっ！　イキ狂えっ、ツバキ！」

――ドッチュゥゥゥゥッッ!!　グチュニチュゥッ、ズプププッ、ズブチュゥゥッ！
「んぎぃいっっ……くっひぃぃぃ――っっっ！　んひっっ、いひあぁぁっ！」
音が届かない、頭が白く染め抜かれる。そして身体中が言うことを聞かないのに、感覚だけはクリアで、身体の奥底までを肉悦が満たしてゆく。肉襞から勢いよく噴いた無色の飛沫が、また髪の毛をドロドロに濡れ汚した。
「ふははは っ、凄まじい反応！　それが絶頂だ、牝恥だ！　イクと叫んで受け入れろ！」
「いひぃぃぃぃんっっ！　いぐっっ、いぐいぐっっ、イクぅぅぅっっっ！」
命じられるままに叫んだツバキの最奥を抉り、トスカータの肉棒は大きく膨らんで、その滾った熱液を余すことなく、ブチ撒ける。
――ビュグビュグビュックゥゥゥッッッ！　ビクビクッッ、ドビュルゥゥッッ！
「んはあぁぁぁっっっ！　いぐぅぅっ、あおぉぉっっ、イッグぅぅぅぅんんっっっ！」
心も頭も、お腹の奥の隅々までも――欲に塗れた白濁を注ぎ込まれ、ツバキは瞳を細めて何度も全身を跳ねさせた。身体中に甘い倦怠感を味わいながら、牡を咥え込んだ黒髪の戦華は、尻穴の椿の華を咲かせ、散らし、命じられるままに牝恥の屈服宣言を叫び放つ。
「イグゥゥゥッッ、んぅっ、イクっっ……あぁぁぁっっ、イッくぅぅぅぅっっ!!」
淫らな液体を撒き散らし悶えるその姿は、頭上で大写しになって男たちを沸かせ、ドリオ国内の端末に永久保存されてしまうのだった――。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

あなたのキモチイイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

電子書籍も配信中!

業界唯一! エロラノベ&エロコミック満載!!

隔月発売

二次元ドリームマガジン

2D DREAM MAGAZINE

魔法、催眠、性転換…不思議Hコミック誌!

隔月発売

大人気PCゲームのコミック多数連載!

コミック UNREAL アンリアル

ヒロインピンチDX

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて! キルタイム 検索 Click

書店、ダウンロードサイトなどで好評発売中!

※いずれも18歳未満の方は購入できません。